

## Questionnaireにおける“?”反応の 選択要因について(Ⅱ)

熊井 桂子      岩渕 次郎

Questionnaire に対してなされる“?”反応は、一般に検査結果の妥当性を低下させるが、他面その反応量にしばしば大きな個人差がみられることから、“?”反応の水準自体には、被検者独自の反応の構え(response set)または反応スタイル(response style)との関連から吟味する余地があるように思われる。すでに前報で岩渕・熊井(1981)は、Questionnaire に対する反応の構えのひとつとして“?”反応傾向(cannot say tendency)を想定し、いわゆる“?”反応多発者(?-sayer)の性格特性の解明を試みるため、Y-G 性格検査における“?”反応の出現状況を、検査自体から抽出された判定結果と交絡させながら検討し、二、三の知見を得たが、本論では、さらに被検者から得た“?”反応の選択理由に関する資料を加えてさきの分析を深めようとするものである。

### 対象と手続き

道内医科大学2学年学生を対象としてY-G 性格検査を正規の手順で集団施行したのち、質問項目中のいずれかに“?”反応を付した被検者に対しては、“?”反応の選択理由に関して予め用意したチェックリスト(表-5 参照)によって、その選択理由を該当項目ごとに記入させた。

結果の処理は、前報と同様であるが、ここでは“?”反応の分析資料として新たに“?”反応の選択理由に関する資料がつけ加えられた。また統計処理には北海道大学大型計算機センター(SPSS パッケージ)が利用された。

なお全被検者は、各人の“?”反応総数の程度に応じてつぎの3種の“?”反応傾向群のいずれかに分類された。

- ① “?”反応稀少群(LQ群): “?”総数0~2点の者(30人, “?”総数平均値0.57 (中央値0.38))
- ② “?”反応中等度群(MQ群): 3~17点(49人, 平均8.96 (8.00))
- ③ “?”反応多発群(HQ群): 18~58点(31人, 平均27.55 (23.00))

## 結 果

“?” 反応傾向と Y-G プロフィール：表-1 は全被検者の尺度別平均粗点と平均 “?” 総数を表わしたものである。尺度別標準点では Co 尺度が「2」の段階に入ってやや協調

表-1 Y-G 尺度別粗点および “?” 反応数

| 尺 度  | 粗点平均 (SD)   | “?” 数平均 (SD) | 尺 度 | 粗点平均 (SD)    | “?” 数平均 (SD)  |
|------|-------------|--------------|-----|--------------|---------------|
| D    | 8.44 (5.63) | 0.78 (1.29)  | Ag  | 10.07 (4.34) | 1.04 (1.28)   |
| C    | 7.70 (4.85) | 0.79 (1.29)  | G   | 10.92 (5.01) | 1.57 (1.95)   |
| I    | 6.55 (5.05) | 0.91 (1.33)  | R   | 10.94 (5.25) | 0.90 (1.47)   |
| N    | 8.68 (5.84) | 0.90 (1.33)  | T   | 9.59 (4.45)  | 1.08 (1.51)   |
| O    | 6.95 (4.50) | 0.73 (0.98)  | A   | 9.94 (5.35)  | 1.16 (1.39)   |
| Co   | 5.36 (3.61) | 1.08 (1.44)  | S   | 12.06 (5.58) | 0.97 (1.32)   |
| (総数) |             |              |     |              | 11.91 (12.32) |

的な方向に傾くほかは他の全尺度が「3」の標準段階に入る。従って平均プロフィールの判定型は当然 A 型となるが、プロフィール自体の流れには上半部各尺度の左寄りと下半部各尺度の右寄り (D 型指向) の傾向がうかがわれた。

“?” 反応の平均総数は 11.91 (SD 12.32) であった。また全被検者の半数以上は “?” 反応が 9 (“?” 反応率 7.5%) 以内であり, “?” 反応を全く示さない者も全体の 15% に及ぶ一方, 最大値は 58 (“?” 反応率 48%) であって, “?” 反応の選択にはかなり大きな個人差がうかがわれた (図-1 参照)。

なお, 各尺度の平均 “?” 反応数は 0.73~1.57 の間に広く分布し, “?” 反応の出現頻度に関して尺度間に差 ( $F=2.87$ ,  $df=11/1308$ ,  $p<.01$ ) が認められた。すなわち G 尺度と A 尺度で “?” 反応が多発する一方, O・D・C 各尺度では “?” 反応の出現が少なかった。また各尺度の “?” 反応の分散にも “?” 総数と同様にかなり大きな個人差が認められた。

表-2 の左欄は “?” 反応傾向の水準の異なる LQ・MQ・HQ 各群の Y-G 尺度別平均

図-1 “?” 総数のヒストグラム

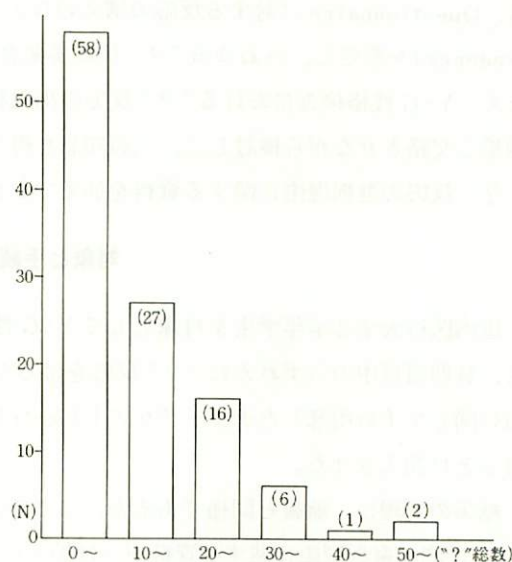


表-2 LQ・MQ・HQの尺度別粗点と修正粗点

| 群<br>尺度 | 正 規 の 粗 点 |       |       | 修 正 粗 点 |      |      |
|---------|-----------|-------|-------|---------|------|------|
|         | L Q       | M Q   | H Q   | L Q     | M Q  | H Q  |
| D       | 8.20      | 8.57  | 8.45  | 4.10    | 4.02 | 3.26 |
| C       | 7.47      | 8.33  | 6.94  | 3.73    | 3.84 | 2.58 |
| I       | 6.33      | 6.31  | 7.13  | 3.17    | 2.80 | 2.52 |
| N       | 9.57      | 7.88  | 9.10  | 4.77    | 3.65 | 3.42 |
| O       | 7.13      | 7.18  | 6.39  | 3.53    | 3.27 | 2.45 |
| Co      | 5.47      | 5.33  | 5.29  | 2.63    | 2.22 | 1.52 |
| Ag      | 9.87      | 10.65 | 9.36  | 4.90    | 4.92 | 3.52 |
| G       | 11.77     | 10.69 | 10.45 | 5.87    | 4.69 | 3.48 |
| R       | 11.60     | 11.08 | 10.07 | 5.80    | 5.22 | 3.94 |
| T       | 9.23      | 9.74  | 9.71  | 4.60    | 4.49 | 3.55 |
| A       | 10.00     | 9.96  | 9.84  | 4.97    | 4.55 | 3.58 |
| S       | 13.67     | 11.49 | 11.42 | 6.80    | 5.45 | 4.49 |

粗点である。I尺度ではHQ群の粗点が高く、C・Ag尺度ではMQ群が、またG・S・R各尺度ではLQ群の粗点が各々高いのに対して、N尺度ではMQ群が、O尺度ではHQ群がともに低くなる傾向がみられるものの、全尺度とも3群間の差は有意ではなかった。ところで、Y-G性格検査においては“?”反応も採点の対象にされるため、“?”反応の多発はそれ自体プロフィールに影響を与える。ここでは、その影響を吟味するため、“?”反応を採点から除去したうえであらためて3群のプロフィールを比較してみた。表-2の右欄は、“?”反応による得点を除いた尺度別得点(修正粗点とする)である。ここでは、Co ( $F=3.55$ ,  $df=2/107$ ,  $p<.04$ )・Ag ( $F=4.55$ ,  $p<.02$ )・G ( $F=5.90$ ,  $p<.004$ )・R ( $F=3.65$ ,  $p<.03$ )・S ( $F=4.93$ ,  $p<.009$ )の各尺度の修正粗点にLQ・MQ・HQの3群間で差が認められた。

“?”反応傾向と判定型：表-3はLQ・MQ・HQ各群の判定型を分類したものである。D型は全数の $\frac{1}{2}$ 近くと最も多く、ついで $\frac{1}{4}$ がC型であり、このC・D両型で全数の60%を占めている。残余はA・B・Eの3型にほぼ等分され、このうち最も少ないのはA型であった。なおC・D両型では定型のプロフィールが最も多く、またA・E両型では準型が、

表-3 LQ・MQ・HQのY-G判定型分類

| 群 \ 型    | A            | B            | C            | D            | E            | 計       |
|----------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|---------|
| L Q      | 1            | 4            | 8            | 11           | 6            | 30      |
| M Q      | 7            | 7            | 13           | 17           | 5            | 49      |
| H Q      | 6            | 5            | 8            | 8            | 4            | 31      |
| 計<br>(%) | 14<br>(12.7) | 16<br>(14.5) | 29<br>(26.4) | 36<br>(32.8) | 15<br>(13.6) | 110     |
| (前報の%)   | (22.8)       | (20.0)       | (11.7)       | (28.9)       | (16.6)       | (N=145) |



さらにB型では準型および重型のプロフィールが目立った。

各判定型の平均“?”反応数は、A (平均“?”総数 $20.07 \pm \text{SD}17.89$ )・C ( $12.24 \pm 11.35$ )・E ( $10.73 \pm 12.86$ )・B ( $10.63 \pm 8.70$ )・D ( $9.53 \pm 10.86$ )の各型の順に低くなり、判定型によって“?”反応傾向に差があるように思われたが、分散分析の結果は10%の有意水準にとどまった( $F=2.03$ ,  $df=4/105$ )。またLQ・MQ・HQ3群の各判定型間の比率に関しても有意差は認められなかったが、LQ群では他群と比べA型が少なくD・E両型の多い傾向が、HQ群ではA型が多くD型の少ない傾向がみられた。なお、A型では“?”反応総数の分散が大きく、“?”反応傾向の水準に群内差のあることが示唆された。

“?”反応傾向と項目特性：ここでは“?”反応傾向を各質問項目の属性との関連から吟味してみることとする。表-4は“?”反応多発項目(反応率15%以上)と稀少項目(5

表-4 “?”反応の多発・稀少各項目と理由別得点の比率

(%)

|                                        | 項目<br>No. | 尺度 | 項 目 内 容 (“?” 反応者)           | Key+<br>反応者 | 理由別得点の比率 |      |      |       |
|----------------------------------------|-----------|----|-----------------------------|-------------|----------|------|------|-------|
|                                        |           |    |                             |             | R 2      | R 3  | R 5  | R’    |
| “?”<br>反<br>応<br>の<br>多<br>発<br>項<br>目 | 77        | G  | いきいきしている (26.4)             | 48.2        | 34.5     | 20.7 | 13.8 | 31.0  |
|                                        | 26        | A  | 会やグループの為に働くのがたのしみである (22.7) | 27.3        | 44.0     | 28.0 | 16.0 | 12.0  |
|                                        | 113       | G  | 動作はきびきびしている (20.9)          | 29.1        | 26.1     | 39.2 | 26.1 | 8.6   |
|                                        | 14        | A  | 会などの時は人の先に立って働く (20.0)      | 20.9        | 9.1      | 63.8 | 13.6 | 13.5  |
|                                        | 65        | G  | 仕事は人よりずっと速い方である (20.0)      | 24.5        | 22.7     | 18.2 | 27.4 | 31.7  |
|                                        | 7         | Co | 世の中の人は人のことなどかまわないと思う (18.2) | 15.5        | 40.0     | 25.0 | 10.0 | 25.0  |
|                                        | 18        | Ag | 正しいと思うことは人にかまわず実行する (18.2)  | 39.1        | 30.0     | 50.0 | 15.0 | 5.0   |
|                                        | 53        | G  | てきぱきと物事をかたずける (17.3)        | 30.9        | 15.8     | 26.3 | 47.4 | 10.5  |
|                                        | 115       | Co | 人は私を十分認めてくれない (16.4)        | 11.8        | 22.1     | 16.7 | 16.7 | 44.5  |
|                                        | 41        | G  | 困ることがあっても、ほがらかでいられる (16.4)  | 36.4        | 33.3     | 33.3 | 11.1 | 22.3  |
| *                                      | 111       | T  | 深く物事を考える傾向がある (16.4)        | 34.5        | 27.8     | 33.2 | 27.8 | 11.2  |
|                                        | 3         | T  | むずかしい問題を考えるのが好きである (16.4)   | 30.9        | 55.5     | 27.8 | 11.1 | 5.6   |
|                                        | 109       | S  | 人中出现てもまごつかない (16.4)         | 49.1        | 33.3     | 55.5 | 5.6  | 5.6   |
| “?”<br>反<br>応<br>の<br>稀<br>少<br>項<br>目 | 68        | O  | たびたびねつかれないで困ることがある (1.8)    | 27.3        | —        | 50.0 | 50.0 | —     |
|                                        | * 15      | T  | 一人きりでいたいと思うことが時々ある (2.7)    | 17.3        | —        | —    | —    | 100.0 |
|                                        | * 13      | S  | 知らぬ人と話すときはかたくなる (3.6)       | 24.5        | 50.0     | 50.0 | —    | —     |
|                                        | * 85      | S  | 新しい友達はなかなかできない (3.6)        | 69.1        | 50.0     | —    | 50.0 | —     |
|                                        | 28        | R  | じっとおとなしくしているのが苦手である (3.6)   | 37.3        | 25.0     | 25.0 | 25.0 | 25.0  |
|                                        | 114       | Ag | 退屈な時は何か強い刺激を求める (3.6)       | 58.2        | 25.0     | 25.0 | 25.0 | 25.0  |
|                                        | 8         | O  | わけもなく喜んだり悲しんだりする (3.6)      | 12.7        | 25.0     | —    | 25.0 | 50.0  |
|                                        | 57        | N  | 人からみられているようで不安である (3.6)     | 15.5        | —        | 25.0 | 25.0 | 50.0  |
|                                        | 48        | D  | 理由もなく不安になることが時々ある (3.6)     | 15.5        | 50.0     | —    | 25.0 | 25.0  |
|                                        | 106       | I  | 何かにつけて自信がない (4.5)           | 16.4        | 20.0     | 40.0 | 20.0 | 20.0  |
|                                        | 11        | C  | 気持ちを顔にあらわしやすい (4.5)         | 57.3        | —        | 40.0 | 40.0 | 20.0  |
|                                        | 36        | D  | 時々自分をつまらない人間だと思うことがある (4.5) | 54.5        | —        | 20.0 | —    | 80.0  |
|                                        | 55        | Co | 人の親切には下心がありそうで不安である (4.5)   | 4.5         | 40.0     | 40.0 | —    | 20.0  |
|                                        | * 62      | A  | 目上の人の前に出るとかたくなる (4.5)       | 50.9        | 20.0     | 60.0 | —    | 20.0  |

(\* “いいえ”で得点化される項目)

%以下)を示したものである。ちなみに全項目の平均“?”反応者数は $10.92 \pm \text{SD} 4.86$ , 平均反応率は10%であった。

“?”反応傾向と項目属性との関連を検討するために、項目別にLQ・MQ・HQ各群の反応頻度について $\chi^2$ -検定を試みたが、全項目のほぼ $\frac{1}{3}$ (44項目)は差を示さなかった。すなわち、これらの項目では“?”反応の選択が個人の“?”反応傾向水準よりも、むしろ項目自体の何らかの属性に依存していることがうかがわれた。なおこの44項目の平均“?”反応者数は、 $7.89 \pm \text{SD} 3.45$ 人であって総平均に比べ明らかに低かった。また、このうちの7項目はO尺度(No.18・20・32等)に属し、5項目はD尺度(No.24・48・72等)に集中した。

熊井・岩渕(1981)はMASとCASの“?”反応傾向の検討に際し、得点化されやすい項目(以下key+とする)と得点化され難い項目(key-とする)があることに注目し、それらのいずれかの項目では、“?”反応が選択され難いことを示唆したが、ここでもY-G性格検査について同様の検討を試みた。

まずkey+項目(key+反応の選択率58%以上)としては、S尺度のNo.1(選択率81%)ほか18項目が、またkey-項目(key-反応の選択率69%以上)としては、Co尺度のNo.55(選択率91%)ほか22項目が各々抽出された。そしてこれらの計40項目をkey項目としたところ、その平均“?”反応者数は $8.37 \pm \text{SD} 3.62$ 人となり、key項目以外(80項目)の平均 $12.19 \pm \text{SD} 4.89$ 人との間にWelchの法で有意な差( $t=4.766$ ,  $df=100.586$ ,  $p<.001$ )が認められた。

また、key+項目とkey-項目との“?”反応傾向を比較すると、前者の“?”反応者数は $9.00 \pm 3.09$ , 後者は $7.86 \pm 3.93$ であって差がないが( $t=0.973$ ,  $df=38$ ,  $p>.10$ ), これをさきのLQ・MQ・HQ各群別に比較してみると、LQ群(key+項目では“?”反応者なし:key-項目の平均“?”反応者数 $0.23 \pm \text{SD} 0.42$ ), MQ群( $2.67 \pm 0.88$ : $2.86 \pm 1.82$ )では差がみられないもののHQ群( $6.33 \pm 2.67$ : $4.77 \pm 2.59$ )では差( $t=1.821$ ,  $df=38$ ,  $p<.10$ )がうかがわれ、LQ・MQ両群とは逆に、key+項目において“?”反応傾向が高まった。

**“?”反応の選択理由:** これまでに“?”反応傾向で個人差の大きいことを眺めてきた。その個人差を“?”反応の選択理由の点から解明するため、“?”反応を選択した理由について個人別・該当項目別にたずねた(各“?”反応の理由を予め用意された8項目の選択肢からひとつずつ選ぶよう指示)。表-5は“?”反応の選択理由と、各理由が選択された頻度(以下理由別得点とする)の平均, SD, 最大値を表示したものであるが、これらの各理由別得点間の差について検定したところ、有意差が認められた( $F=22.497$ ,  $df=7/872$ ,  $p<.005$ )。すなわち全被検者の70%以上が(R4)「そのような経験がないのでわからない」(個人別平均“?”総数の2%), (R7)「できればはっきりとした回答をさ



表-5 “?” 反応の選択理由と平均理由別得点

|     | 選 択 理 由                              | 平 均<br>(%)     | S D  | Max |
|-----|--------------------------------------|----------------|------|-----|
| R 1 | 質問の内容自体がよく理解できないので回答できない。            | 0.51<br>( 4.3) | 1.05 | 6   |
| R 2 | 条件設定 (時と場合・程度など) があいまいなため一概には回答できない。 | 3.16<br>(26.5) | 4.80 | 28  |
| R 3 | 条件設定には問題はないが、「はい」のときも「いいえ」のときもある。    | 3.78<br>(31.8) | 5.91 | 38  |
| R 4 | そのような経験がないので (乏しいので) わからない。          | 0.22<br>( 1.9) | 0.57 | 3   |
| R 5 | 「はい」と「いいえ」のちょうど中間程度である。              | 2.50<br>(20.9) | 3.36 | 16  |
| R 6 | 質問されたことについて、自分でも自分がわからない。            | 0.82<br>( 6.9) | 1.83 | 10  |
| R 7 | できればはっきりとした回答をさせたい。                  | 0.26<br>( 2.2) | 0.85 | 5   |
| R 8 | そ の 他                                | 0.66<br>( 5.5) | 2.16 | 16  |

きたい」(2%), (R 1)「質問の内容自体がよく理解できない」(4%)などの理由を全く選択しなかったが、逆に (R 3)「“はい”のときも“いいえ”のときもある」(32%)という理由は全被検者の65%以上に少なくとも一度以上は選択され、(R 2)「条件設定があいまいなため回答できない」(27%), および (R 5)「“はい”と“いいえ”のちょうど中間程度」(21%)という理由は各々60%前後の者に選択されている。(R 8)「その他」(6%)の理由を挙げた者は全体の25%であるが、ほとんどの者は120項目中の2～3項目についてであり、4項目以上にこの理由を挙げた者はわずか3%にすぎなかった。

この理由別得点を “?” 反応傾向の水準の異なる3群で比較すると、いずれの理由においても差 ( $F=3.164$  (R 8) ~  $58.313$  (R 5)) が認められ、各得点ともHQ・MQ・LQの順に低くなった。そこで各得点の3群間の比率に注目し、“?” 反応総数にもとづく平均 “?” 反応率 (23.0%, 7.5%, 0.5%) との比率を比べるため適合度検定を試みたところ、3群間の “?” 総数の比率と異なる割合を示す選択理由はみられなかった (すべての  $\chi^2$  値が1.00以下,  $df=2$ )。

“?” 反応の選択理由とY-G尺度: “?” 反応に関する理由別得点と各尺度粗点との相関を求めた結果、(R 1)・(R 4)・(R 6)・(R 7)といくつかの尺度との間に低いが有意な相関が得られた。まず、(R 1)はA尺度 ( $r=-.296$ ), S尺度 ( $-.340$ )と負の相関関係を示し、(R 4)はR尺度 ( $-.227$ ), A尺度 ( $-.211$ ), S尺度 ( $-.220$ )と、(R 6)はS尺度 ( $-.240$ )とそれぞれ負の相関を示し、(R 7)はCo尺度 ( $.211$ )と正の相関を示しており、全体的には (R 2)と (R 7)を除く他の6つの理由別得点が、Y-Gプロフィール上半部6尺度と正の相関を、下半部6尺度とは負の相関を示す傾向がみられた。なお、(R 2)はT尺度とのみ正の相関を示す以外すべて負の相関を示した。

尺度別の “?” 反応数と理由別得点との相関は正の値をとるが、そのうち高相関の得

られたものを選択理由別に挙げると、(R 1) はD尺度 (.423), A尺度 (.589) と、また (R 2) はC・I・O・Co各尺度を除いた8尺度との間に少なくとも.436 (D尺度) 以上の正の相関を示した。さらに (R 3) はD尺度を除いた11尺度と.417 (S尺度) 以上の相関を示し、特にC・I・N各尺度とは.718 (N尺度) ~.732 (C尺度) の高い相関を示した。しかし、(R 4) はS尺度との間で.428の相関を得たにとどまった。(R 5) はCo尺度を除く11尺度との間に高相関がみられ、(R 6) はN (.466)・R (.430)・S (.440) 各尺度とかなりの相関を示した。(R 7) はI尺度 (.401) およびCo尺度 (.557) とかなりの相関を示したが、(R 8) はいずれの尺度とも高い相関を示さなかった。

これらの各尺度の“?”反応傾向はさらに“?”反応の選択理由別に分類することができる。ここでは8つの選択理由から理由別得点の高い(R 2)・(R 3)・(R 5) およびそれ以外の理由((R')とする)の4種について各尺度別の“?”反応数を計上した。表-6はその平均とSDを示したものである。各理由別の“?”反応数はいずれも尺度間

表-6 各尺度の平均理由別得点

| 選択理由<br>尺度 | R 2<br>平均 (SD)    | R 3<br>平均 (SD)    | R 5<br>平均 (SD)    | R'<br>平均 (SD)     |
|------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| D          | 0.191 (0.516)     | 0.191 (0.417)     | 0.200 (0.571)     | 0.200 (0.647)     |
| C          | 0.218 (0.496)     | 0.218 (0.709)     | 0.173 (0.504)     | 0.182 (0.510)     |
| I          | 0.173 (0.466)     | 0.436 (0.972)     | 0.155 (0.411)     | 0.145 (0.403)     |
| N          | 0.145 (0.403)     | 0.418 (0.850)     | 0.182 (0.473)     | 0.155 (0.492)     |
| O          | 0.155 (0.411)     | 0.191 (0.550)     | 0.164 (0.418)     | 0.218 (0.496)     |
| Co         | 0.318 (0.777)     | 0.164 (0.516)     | 0.164 (0.418)     | 0.436 (0.819)     |
| Ag         | 0.327 (0.705)     | 0.418 (0.902)     | 0.127 (0.361)     | 0.164 (0.440)     |
| G          | 0.427 (1.036)     | 0.427 (0.829)     | 0.391 (0.847)     | 0.327 (0.743)     |
| R          | 0.218 (0.548)     | 0.273 (0.753)     | 0.255 (0.612)     | 0.155 (0.652)     |
| T          | 0.373 (0.876)     | 0.318 (0.690)     | 0.227 (0.536)     | 0.164 (0.479)     |
| A          | 0.327 (0.825)     | 0.464 (0.774)     | 0.182 (0.473)     | 0.182 (0.453)     |
| S          | 0.282 (0.665)     | 0.264 (0.585)     | 0.282 (0.637)     | 0.145 (0.425)     |
| 合 計        | 3.155 (4.801)     | 3.782 (5.914)     | 2.500 (3.361)     | 2.472 (2.330)     |
| F-値        | 2.070 ( $p<.05$ ) | 2.594 ( $p<.01$ ) | 1.990 ( $p<.05$ ) | 2.709 ( $p<.01$ ) |

で差が認められ、G・T・A・Ag各尺度では他尺度と比べ“?”反応を選択する理由として(R 2)が選ばれやすく、(R 3)の理由はA・I・G・N・Ag各尺度で、また(R 5)はG・S・R・T各尺度で目立った。

さらに各判定型の間で各理由別得点を比較すると、まずC尺度における(R 2)の理由別得点はB(平均 $0.563 \pm \text{SD} 0.892$ )・A( $0.214 \pm 0.426$ )・C( $0.172 \pm 0.384$ )・D( $0.164 \pm 0.378$ )・E( $0.067 \pm 0.258$ )の各判定型の順に低くなった( $F=2.583$ ,  $df=4/105$ ,  $p<.04$ )。同じくA尺度における(R 2)の理由別得点は、C( $0.759 \pm 1.272$ )・D( $0.250$ )



$\pm 0.692$ )・A ( $0.143 \pm 0.363$ )・B ( $0.125 \pm 0.342$ )・E ( $0.067 \pm 0.258$ ) の各判定型の順に低くなった ( $F=3.065$ ,  $df=4/105$ ,  $p<.02$ )。また R 尺度における (R 3) の理由別得点は A ( $0.857 \pm 1.610$ )・E ( $0.400 \pm 0.828$ )・B ( $0.250 \pm 0.577$ )・D ( $0.139 \pm 0.351$ )・C ( $0.103 \pm 0.310$ ) の各判定型の順に低くなった ( $F=3.089$ ,  $df=4/105$ ,  $p<.02$ )。なお、I 尺度における (R 5) の理由別得点についても各判定型の間で差 ( $F=3.213$ ,  $df=4/105$ ,  $p<.02$ ) が認められたが、各判定型における得点の高低は “?” 総数にみられる本来的な高低 (A 型の平均 “?” 反応率 16.7%・B 型 8.9%・C 型 10.2%・D 型 7.9%・E 型 8.9%) と同じ順であった。

“?” 反応の選択理由と判定型：表-7 は各 “?” 反応選択理由の平均理由別得点と SD を判定型別に示したものである。さきの表-3 から A 型では “?” 反応傾向が高く、D

表-7 各判定型の平均理由別得点

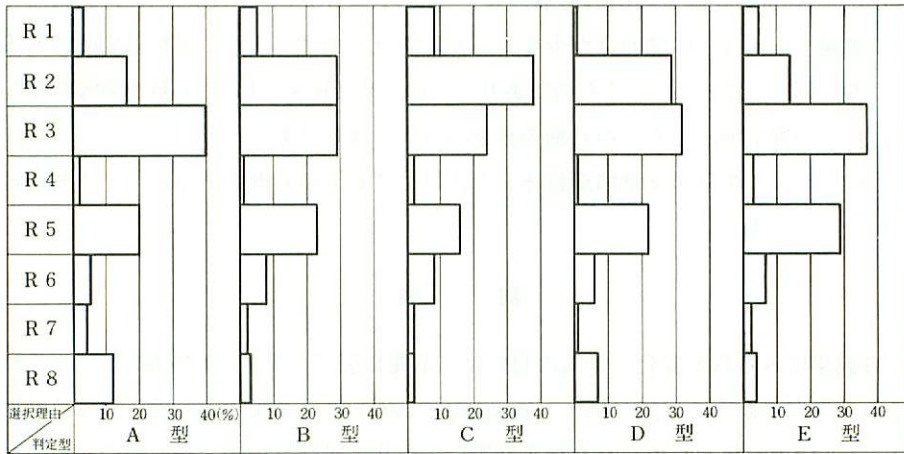
| 判定型<br>選択理由  | A             | B             | C             | D             | E             |
|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
|              | 平均 (SD)       | 平均 (SD)       | 平均 (SD)       | 平均 (SD)       | 平均 (SD)       |
| R 1          | 0.57 ( 0.90)  | 0.56 ( 0.86)  | 0.97 ( 1.61)  | 0.14 ( 0.42)  | 0.40 ( 0.49)  |
| R 2          | 3.14 ( 3.76)  | 3.06 ( 3.46)  | 4.59 ( 5.90)  | 2.75 ( 5.02)  | 1.47 ( 2.55)  |
| R 3          | 7.93 (11.76)  | 3.13 ( 3.66)  | 2.97 ( 3.53)  | 3.03 ( 3.90)  | 4.00 ( 5.57)  |
| R 4          | 0.36 ( 0.61)  | 0.06 ( 0.24)  | 0.24 ( 0.57)  | 0.11 ( 0.39)  | 0.33 ( 0.60)  |
| R 5          | 4.00 ( 4.02)  | 2.44 ( 2.78)  | 1.97 ( 2.62)  | 2.11 ( 3.43)  | 3.13 ( 3.72)  |
| R 6          | 1.00 ( 1.41)  | 0.88 ( 1.65)  | 0.97 ( 2.03)  | 0.61 ( 1.48)  | 0.80 ( 2.48)  |
| R 7          | 0.71 ( 1.49)  | 0.19 ( 0.53)  | 0.24 ( 0.73)  | 0.14 ( 0.67)  | 0.27 ( 0.77)  |
| R 8          | 2.36 ( 4.30)  | 0.31 ( 0.58)  | 0.24 ( 0.57)  | 0.64 ( 2.21)  | 0.33 ( 0.79)  |
| “?”総数        | 20.07 (17.89) | 10.63 ( 8.70) | 12.24 (11.35) | 9.53 (10.86)  | 10.73 (12.86) |
| 前報の<br>“?”総数 | 22.70 (14.64) | 18.97 (13.56) | 19.65 (14.04) | 14.43 (12.50) | 16.83 (15.25) |

型では低いという傾向がうかがわれたが、表-7 に示されるように理由別得点にも判定型の間で差があるように思われる。そこで各理由別得点に関する A～E 判定型間の分散分析を試みたところ、(R 1) ( $F=2.729$ ,  $df=4/105$ )・(R 8) ( $F=2.796$ ,  $df=4/105$ ) では 5% 水準で有意差が認められ、(R 7) ( $F=4.521$ ,  $df=4/105$ ) では 0.5% 水準で差が認められた。なお (R 3) ( $F=2.146$ ,  $df=4/105$ ) では 10% 水準にとどまった。すなわち (R 1) の理由別得点は C 型で最も高く、ついで A・B・E・D 各型と順次低くなる。(R 7) の理由別得点は A 型で高く、ついで E・C・B・D 各型の順に低くなる。(R 8) は A 型で圧倒的に高く、D 型がこれに次ぎ、C 型では最も低くなる。(R 3) の理由別得点も同様に A 型で圧倒的に多く、C 型で最も少ない。

図-2 は各判定型の理由別得点の比率を判定型別に図示したものである。全被検者を対象とした各理由別得点の割合との適合度検定を判定型毎に試みた結果、A 型 ( $\chi^2=18.97$ ,  $df=7$ ,  $p<.01$ ) および C 型 ( $\chi^2=21.72$ ,  $df=7$ ,  $p<.005$ ) に特有の選択傾



図-2 各判定型の“?”反応選択理由の比較



向がみられた。すなわちA型では“?”総数の40%近くが(R 3)の理由で選択され、また20%近くは(R 5)の理由によるものであった。さらにA型では、他の判定型にほとんどみられない(R 8)が10%以上を占めた。一方、C型では(R 2)の割合(37%)が(R 3 ; 24%)を上廻るのが特徴的であった。これらの結果は、それぞれの判定型によって注目する選択理由が異なることを物語っており、“?”反応に何らかの個人特性が関与していることを示唆している。

“?”反応選択理由と項目特性：表-8は“?”反応選択理由別に選択率の高い項目を抽出したものである。(R 1)の平均選択率は“?”総数の4.3%にすぎないものの、(R 1)の総得点の2割はNo.56に集中した。“?”総数の26.5%を占める(R 2)、31.8%を

表-8 各選択理由の多発項目

| 項目No. | 尺度 | 項目内容 (“?”反応者数)            | 最頻理由 (%)   |
|-------|----|---------------------------|------------|
| 56    | O  | 頭がよくなったり、悪くなったりきまらない (13) | R 1 (84.6) |
| 26    | A  | 会やグループの為に働くのがたのしみである (25) | R 2 (44.0) |
| 14    | A  | 会などの時は人の先に立って働く (22)      | R 3 (63.6) |
| 17    | G  | 短い時間に沢山の仕事をする自信がある (14)   | R 4 (21.4) |
| 31    | Co | 親友でもほんとうに信用することはできない (13) | R 4 (23.1) |
| 50    | A  | 世話役はいつも人に頼むことにしている (13)   | R 7 (23.1) |
| 53    | G  | てきぱきと物事をかたずける (19)        | R 4 (23.1) |
| 77    | G  | いきいきしている (29)             | R 5 (47.4) |
| 115   | Co | 人は私を十分認めてくれない (18)        | R 6 (13.8) |
| 119   | C  | 感情的である (12)               | R 6 (22.2) |
| 30    | Ag | 目上の人とも遠慮なく議論することがある (12)  | R 6 (33.3) |
| 36    | D  | 時々自分をつまらぬ人間だと思ふことがある (5)  | R 8 (25.0) |
| 65    | G  | 仕事は人よりずっと速い方である (22)      | R 8 (60.0) |
| 116   | O  | 座っていても気分が落ちつかない (10)      | R 8 (13.6) |
|       |    |                           | R 8 (30.0) |

占める (R 3), および 20.9% を占める (R 5) は, 各々 No. 26・14・53 で 10 人ほどによって選ばれたが, (R 1) を除き理由別得点の低い (R 4)・(R 6)・(R 7)・(R 8) は, “?” 反応の多発する項目との関わりが少なかった (No. 36 に対する “?” 総数は 5 個であるがそのうち 3 個は (R 8) によるものであり, このため (R 8) はこの項目で 60% を占める)。なお, 全ての選択理由とも, 項目別の最少の選択率は 0 であった。

以上のほか, 各項目の文章構造自体にも注目して若干の分析を試みたが, のちの討論で触れることとする。

## 討 論

**Y-G 結果にみられた変化:** 本論の目的は, 前報に引続き Y-G 性格検査にみられる “?” 反応傾向を個人の反応の構え (response set) とみる観点から検討することにあるが, ここでの対象から得られた検査結果は, 熊井・岩淵 (1980) や前報の対象のものとおよそ次の 2 点で変化がうかがわれる。すなわち, ① プロファイルは前回と同様基本的には A 型に入るが, 一部の尺度 (D・N・O・Co) に変動 ( $p < .05$ ) がみられ, わずかながら D 型指向に傾き, 前回よりもやや協調性に富み客観的であり, 抑うつ性や神経質な傾向が低くなった。このことに付随して, 各判定型の比率にも若干の変化がみられ, 特に C 型の増加と A 型の減少が目立った。② “?” 総数が減少し (18.20 → 11.91;  $t = 3.70$ ,  $df = 253$ ,  $p < .01$ ), 辻岡 (1972) の京大男子学生を被検者とした時の平均 8.68 に近い値となった。これによって LQ・MQ・HQ 3 群の分類基準が前回と大きく異なった。この “?” 平均総数を判定型別に前報と比較してみると, B 型の “?” 総数が前報よりも減少した (18.97 → 10.63) ほかは, 各判定型別 “?” 総数は変化していない。それにも拘らず前回よりも “?” 平均総数が明らかに減少したのは, “?” 反応が他型よりも圧倒的に多い A 型 (20.07) が減少し (22.8% → 12.7%), 反面 “?” 反応の最も少ない D 型 (9.53) が増加 (28.9% → 32.7%) したことなどによってもたらされたものである。

上記のごとく, 本報における Y-G 性格検査の結果は, 前報のものとかなり様相を異にしているが, 両被検者集団の平均属性 (年齢・履歴など) がほぼ等質であること, および検査の施行要領や結果の処理法で変化がないことなどから, これらの差異に関しては, さらに新らたに得られる同質集団の資料との照合を通して検討される必要があると思われる。

**“?” 反応の主要な選択理由:** “?” 反応を選択した理由として挙げられた項目では, (R 3) 「“はい” のときも “いいえ” のときもある」 (“?” 総数の 30%), (R 2) 「条件設定があいまいなため回答できない」 (25%), (R 5) 「“はい” と “いいえ” のちょうど中間程度である」 (20%) が, 他の諸理由 (2 ~ 7%) と比べ著しく目立った。

(R 3) の理由別得点は, No. 14 (会などの時は人の先に立って働く), No. 18 (正しいと



思うことは人にかまわず実行する), No.109 (人に出てもまごつかない) 等で高いが, これらの項目への“?”反応は, 質問内容自体のあいまいさよりもむしろ状況設定の不十分さによって誘発されたと思われる点で, つぎの(R2)の場合と類似している。

(R2)は, 条件設定のあいまいさに基づく回答の回避(乃至留保)とみなされるが, その多発項目はNo.26(会やグループのために働くのがたのしみである), No.77(いきいきしている), No.3(むずかしい問題を考えるのが好きである)等であって, 必ずしも(R3)の多発項目とは重複しない。このことから, (R2)および(R3)の各多発項目が内包する刺激価の質的差異に関して, なお検索の余地があるとおもわれる。

ところで, Y-G性格検査の質問項目に含まれる一般的多義性を構文中の「頻度」に関する副詞の点から考察すると, 「たびたび」を文中に含む9項目での“?”反応者数は $8.22 \pm 2.70$ 人, 「いつも」(8項目)では $9.13 \pm 2.09$ , 「時々」(7項目)では $6.14 \pm 2.42$ となり, この3群( $7.92 \pm 2.71$ )にさらにすべての「頻度」に関する副詞を含む項目(「大体いつも」・「しばしば」・「なかなか」・「ほとんど」など)をも加えた項目群( $8.18 \pm 2.93$ )と, 「頻度」に関する副詞を含まない項目群( $11.75 \pm 3.93$ )との間には, Welchの法で差( $t=5.12$ ,  $\nu=58.581$ ,  $p<.001$ )が認められて, 一般に「頻度」に関する副詞によって条件設定が明らかな場合の方が“?”反応傾向の低くなることが示された。なおこのことについて小嶋(1975)は, 「頻度」に関する副詞が“?”反応傾向に影響を与えるが, その種類によっては影響のしかたが異なることを指摘している。

また, No.56(頭がよくなったり悪くなったりきまらない)で“?”反応を示したものは13人であるが, そのうちの11人(84.6%)は他の質問項目ではほとんど選択されない(R1)「質問の内容自体がよく理解できない」の理由で“?”反応を選択しており, この項目の文意自体が理解困難なことがうかがわれた。同時に, No.19(スパイのような人がたくさんいる)でも8人中4人が(R1)の理由で“?”反応を選択しており, さきのNo.56とともに全項目中で最も被検者を当惑させる記述と思われた(なお, “?”反応のほとんどは, 予め設定された(R1)~(R7)の諸理由によって説明されており, (R8)「その他の理由」(自由記述)による“?”反応は6%ほどに止まった。さらにそこでの具体的な理由では, 質問内容の誤解・回答の誤まり・理由の忘却など, “?”反応の選択理由として必ずしも本質的とはみなされ難いものが目立っている)。

**各判定型にみられる“?”反応選択理由の特徴:**各判定型別の主要な選択理由には, 図-2および表-7のごとき特徴がみられた。

まず, A型では(R3)が高く, ついで(R5)・(R2)・(R8)・(R6)「質問されたことについて, 自分でも自分がわからない」・(R7)「はっきりとした回答をさけたい」・(R1)・(R4)「経験がないのでわからない」の順に低くなった。このA型の理由別の構成比を全被検者の平均構成比と比較したところ有意差が得られ, 他型と比べて(R3)・

(R 8)・(R 7)が高く、(R 2)が低いという特徴がみられた。

B型では(R 3)・(R 2)がともに高く、(R 5)・(R 6)がそれに続くが、その他の各理由は極めて低かった。なお、D型も(R 8)が若干高いほかはB型と同様の傾向を示し、両型とも各判定型に特有な特徴はみられなかったが、尺度別に求めた各理由別得点では(R 2)でB型、D型それぞれに他型と異なる傾向がみられた。すなわちB型ではC尺度で(R 2)が多発し、気分の変化に関する質問項目と(R 2)との関連が示され、またD型では(R 2)がA尺度で多発し、支配性に関する質問項目との関連がうかがわれた。

また、C型ではA型と同様に全被検者の平均構成比との間に有意差がみられ、(R 2)の比率(38%)が最も高く、(R 3)がそれに次いだ(他の判定型では両理由の順位は逆転する)。かりに(R 2)が(R 3)に比べて状況設定のあいまいな刺激へのより回避(乃至留保)的な色彩を持つ理由とみなせるならば、(R 2)の本型における優位は、Calm Type とよばれる本型特有の性格特性の一端を反映するものかもしれない。

ところで、C型で他型の比率よりも高い理由は(R 1)であり、低い理由は(R 8)となった。また、C型では尺度別の各理由別得点を他判定型と比べると、とくに(R 3)がR尺度で有意に低いところから、C型における全(R 3)の比率の低下がR尺度の質問項目と関連していることがわかる。

最後に、E型では全被検者の構成比との間で差はみられなかったものの、(R 5)が高く(R 2)が低い傾向がみられ、とくに(R 5)との親和性が特徴的であった。

“?” 反応の選択理由と Y-G 尺度：つぎに尺度粗点との相関から各理由について検討を加えてみた。(R 1)はA・S両尺度と負の相関を示し、「社会的に服従的」・「非主導的」な傾向を持つ対象群では(R 1)の理由別得点が高く、「支配的」で「社交的」な群ではこの得点が低いことが示唆された。同様に(R 4)の得点は、「非主導的」かつ「のんきでない」群で高く、逆に「非主導的」で「のんき」な群ではこの得点が低かった。また(R 6)の理由は、社会的な接触を嫌う群に好まれるように思われた。これらの3つの理由が「非主導性」・「非衝動性」の両因子と関連をもつのに対し、(R 7)の理由は協調性の指標 Co 尺度と相関を示し、「非協調的」なほどこの理由が選択される傾向がみられた。

さきに各理由の判定型との関連について触れたが、各尺度粗点と理由別得点との相関が上下6尺度の間で異なる傾向をもつことから、さらに、(R 1)・(R 3)～(R 6)・(R 8)の理由別得点の高い者ではE型に、また低い者ではD型にそれぞれ近づく傾向がうかがわれた。これと同様に(R 2)が高いほど判定型はC型に近づき、低い程B型に近づくことが示された。

ところで、各理由はそれぞれいくつかの尺度の“?” 反応と関連を示した。すなわち、(R 3)の比率はI・N・Ag・G・A各尺度で高いが、D尺度では低いこと、同時に(R 2)はAg・G・T・A各尺度で高いこと、(R 6)はG・R・T・S各尺度で高いことなどであっ



た。しかし各尺度の“?”反応と理由との関連が因子レベルでは一定の傾向を持たないことから、この関連は尺度自体の特性よりもむしろ各尺度を構成する質問項目自体の刺激特性から生じたものと思われた。

なお、O・D・C各尺度（各質問項目の平均“?”反応者数：8.0±SD3.6, 8.6±2.5, 8.7±2.2）では、他尺度と比べ“?”反応の出現が少なく、尺度を構成する各質問項目の分散も小さいことから、個人の“?”反応傾向の水準が反映し難い尺度と考えられた。

**質問項目のあいまいさ・その他：**いうまでもなく“?”反応の出現状況は“?”反応傾向の水準に関わる個人の特性のみならず、質問項目自体のあいまいさによってももたらされるものである。本研究では、LQ・MQ・HQ 3群間で“?”反応の出現に関して差のみられない項目が全質問項目中の35%以上を占めた。これらの項目は“?”反応の出現に際して個人の“?”反応傾向水準の影響を受けないものと考えられ、“?”反応が個人の“?”反応傾向の水準のみによって決定されるのではなく、質問項目自体のあいまいさによっても影響されることが確かめられた。

最後に、“?”反応の出現をkey項目（被検者の反応がほとんど“はい”か“いいえ”かのいずれか一方に偏る項目）およびその他の項目とで比較してみると、key項目では“?”反応の出現が少なく、その他の項目では多発することが示された。この傾向はすでに熊井・岩渕がMAS・CASで指摘し、いわゆる得点化の回避傾向と解釈したものである。Y-G性格検査でも“?”反応の選択行動がさきと同様に得点化の回避傾向と説明され得るかはなお今後の課題として残る。

## 要 約

反応の構えのひとつとして想定される“?”反応傾向について、おもにY-G性格検査で得られた性格指標と“?”反応に付された諸理由とから検討を加えた結果、およそつぎのような知見を得た。①Y-GプロフィールでのA型では“?”反応傾向が高く、D型では低いこと。②“?”反応の選択理由で目立つのは、「“はい”のときも“いいえ”のときもある」（R3；全“?”反応中の32%）・「条件設定があいまいで回答できない」（R2；27%）・「“はい”と“いいえ”のちょうど中間程度」（R5；21%）などであり、全“?”反応のほぼ半がこれらの理由によるものであった。③C型では、他の判定型の場合よりも（R1）「質問内容自体がよく理解できないので回答できない」の理由が多用される反面、（R3）が少ないなど、いくつかの判定型には“?”反応の選択理由に若干の特徴がうかがわれた。④I・N両尺度では他の尺度の場合よりも（R3）の理由が、S・R両尺度では（R5）がそれぞれ多発するなど、いくつかの尺度と“?”反応の選択理由との間に特有の関連が見出された。⑤“?”反応の出現は個人の“?”反応傾向の水準に加え、質問項目自体のあいまいさによっても影響を受けることが確かめられたほか、質問項目の構文に

注目しながら、項目自体のあいまいさについて考察を加えた。

## 文 献

- 岩淵 次郎・熊井 桂子 Questionnaire における “?” 反応の選択要因について (I) 旭川医科大学紀要 (一般教育) 1981, 3, 59-67.
- 小嶋 外弘 質問紙調査 心理学研究法 9 巻 続有恒・村上英治編 東京大学出版会 1975, 249-255.
- 熊井 桂子・岩淵 次郎 Questionnaire における “?” 反応の内容検討について 北海道心理学研究 1980, 3, 31-32.
- 熊井 桂子・岩淵 次郎 顕現性不安尺度のscoringをめぐって 旭川医科大学紀要 (一般教育) 1981, 3, 69-81.
- 辻岡 美延 新性格検査法 竹井機器工業株式会社, 1972.

(旭川医科大学 心理学)